

今年、梅雨明けが早かったと思ったら、毎日30度を超す暑い夏が続いています。皆様いかがお過ごしですか？

ブランチの窓から見える木々たちも、聞こえる小鳥の声もセミの声も夏そのものです。

ブランチは、この夏で4年目を迎えることになりました。共同で住む住み方にも、この3年間で興味をもって下さっている方も増えたような気がしています。それは、今の社会の変化と関係しているかもしれません。

2020年の冬頃から、新型コロナウイルスの感染が世界中で広がり、日本でも、人との距離を置きながら、関わるという新しいコミュニケーションの取り方を考えざるを得なくなりました。その象徴がマスクだったように思います。マスクの供給が追いつかず、社会的なパニックになりました。先を争って薬局にスーパーに詰めかけ、隠してあるのだろうと苛立ち、販売店員に暴言を吐き、店員に向ってはマスクをしていないと非難したことが報道されていたことを覚えています。その辺りから、エッセンシャルワーカーという言葉をよく聞くようになりました。

エッセンシャルワーカーとは、人々が日常生活を営む上で必要不可欠とされるものです。医療・福祉や保育、生活インフラ、小売業、運輸・物流、公共サービスなど、なくなると社会が回っていかなくなり、私たちの生活が出来なくなるものですが、その重要性に対する認識は決して十分ではなかったと思います。

感染拡大防止のために、ステイホームと言われる、家にいられる方は確かにいるでしょう。けれど、1日も欠かさず必要な食糧に携わる仕事を人々がステイホームしたら、スーパーには野菜や果物がなく、棚の食糧や日用品も手に入らなくなります。

医療、日々の介護や保育に携わる人達がいなかったら、命の危機に陥ってしまいます。そのような重要性に気が



かなかったことに、自分でも愕然とした覚えがあります。そして、今や働く人の大半はエッセンシャルワーカーなのです。

マスクの安定した供給ができるようになった今でも、色々な場面で、今度は、あの人が、咳をしたからコロナではないか。あの人が触ったから触れないでおこう。手を洗わなくては。何回洗えばいいのだろう。あの人は洗っていないのではないか。

そのように自分を追い詰め、そして他人を疑いながら、周りを差別して排除していく。そんな閉鎖的な思いを持ちながら人は生きられるのでしょうか。

私はどんなに相手を疑ってもやはり、人は一人では生きていないと思うのです。



そして、その分断の中で、東京オリンピック2020が、無観客で始まりました。7月22日の開会式を見られた方も多いのではないでしょうか。

全くイメージがつかめないまま、私は、なぜこんなに夜遅くにすることになったのだろうと、思いつつも見ていた一人ですが。(確かに、花火とドローンの光の演出は暗くなくてはいけなかもしれません。)

その時に、ふと感じた違和感がありました。無観客であるにもかかわらず、客席はいろいろな色に塗られあたかも人が大勢集まり、歓声やざわめきさえ聞こえているように覚えたのです。

選手たちは、マスクをしていて、弾む声も聞こえないはずだし。観客の高揚感も選手の存在感も、観客の高揚感も選手の存在感もなく、揺れる空気もないはずなのに・・・。

この違和感は何だったのでしょうか。実際そうではないのに、楽しそうに感じてしまうその自分の感情にだったのかもしれませんが。

私自身、以前アウシュビッツを訪ねその負の遺産を学び、1936年ベルリンオリンピックがユダヤ人や人種差別の偏見を隠すナチス党の大衆操作に利用されたことをふと思いだしました。

連休、夏休みを通してテレビで私たちはその各国からの素晴らしい選手たちの活躍を見ることが出来ます。けれど、同時に、同じ日本の中、コロナを通して明らかにされた困窮に陥っている人たちがいて、私たちの生活を支えているエッセンシャルワーカーの働きがある事が忘れがちになっていることを思います。

共感する気持ち、支援され、支える立場いろいろな立場を持ち人は生活しているように思います。



さて、ランチにもこの半年いろいろな方が訪ね、関わっていただきました。

・ランチに今年3月終わりから、ショートステイの方が時々利用されています。その方は、前回の通信にも少し触れてありますが、コロナ禍で突然解雇されてしまい、これからの生活を考える機会としてランチを利用され、新しい空気を運んでくれました。まず食事、料理好きな彼女は、次々に今まで食べた事のないような料理を食卓に出してくれました。ちょっとしたスパイスでこんなに料理が変わるなんて、驚きでした。

・ご友人も訪ねてこられ、ゆっくりお茶ができる場となったり、連れてこられたお子さんが図書室で本を読んだり、遊んだり、一時でも、居場所を提供することが出来たように思います。

・また、こひつじ文庫(教会で開設している文庫)で借りた本も置いてあるので、用いてもらえるのではないかとも思います。やはり、なかなか人が集まらない事がネックになっていますが、本を読むのに、大騒ぎする必要はありません。お互いの心を認め合っていくそんな働きがあるように思います。文庫は小さな働きですが、支援を受けてまた今年も新しい本が入ります。

・大学生が、同居する小学生の習い事や勉強の応援に来てくれています。お礼は、普段の食事ですが皆でテーブルを囲むことの幸いを思います。コロナ感染予防のために、大学がリモート授業になってしまい、バイトも出来ない、友人とも会えない学生生活に不安を持ちつつも、将来を模索している彼女たちに教えられることは沢山あります。

・また、月一回の美容室としても使ってもらっています。生活は、美しくなくては・・・。

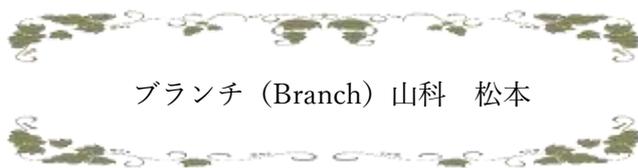


「おはよう」と朝は挨拶、「宿題したの?」と夏休みの毎日。「体調どう?」そんな身近な会話が、共同で生活していくには欠かせません。けれどそれすら、難しく感じる小さな存在です。互いの存在を認め合い、他者を受け入れて生きるとはどういうことなのかを、これからも考えていくことが出来たらと思います。

4年目のランチもまたよろしくお願いします。

「貧しい者がかすめられ、乏しいものが嘆くゆえに、わたしは今立ち上がって、

彼らをその慕い求める安全な所に置こう」詩篇 12:5



ランチ (Branch) 山科 松本